

(令和4年1月試験研究業務月報)

試験研究課題：新規発生害虫ネギハモグリバエ別系統の発生生態の解明と防除技術の確立

研究

ネギハモグリバエ バイオタイプBに対する殺虫剤の効果検定

ネギハモグリバエはネギの葉に潜り込んで食害する害虫です。従来は白い筋状の被害でしたが、近年は葉全体に広がり葉が白く枯れたような被害が発生しています。これについて、当所では2018年3月に新しい系統(バイオタイプB)による被害であることを報告しました。

当所ではバイオタイプBに関する各種殺虫剤の効果検定*を行っています。効果の高い薬剤を明らかにし、効率的な防除につながるよう支援します。

- * 効果検定：府内で採集、累代飼育した本虫に薬剤に浸漬したネギ葉を供与し、幼虫及び成虫の死虫数を調査します。



(左) バイオタイプA (右) バイオタイプB
ほ場での被害の違い



(左) 成虫 (右) 幼虫
(見た目によるバイオタイプの判別は困難)



ネギの葉の殺虫剤浸漬処理

(令和4年1月試験研究業務月報)

試験研究課題：高リコペンニンニンジン有望系統の栽培特性把握

研 究

金時ニンジン新系統の栽培特性、加工適性を評価

当所では、国営開発農地における新たな加工契約野菜として金時ニンジンに着目し、従来の金時ニンジンよりも作りやすい園芸部で育成された新系統について、生育や収量・品質などの栽培特性把握試験を行っています。これまでの試験結果から新系統は根先まで赤く、収量性は慣行品種より多くなる傾向であることがわかっています。

今回、加工会社においてペーストやダイスカットなどの加工適性について評価するため、収穫物を規格に沿って調製・選別し出荷しました。

試験結果は、丹後地域のニンジン生産部会へ報告し、現地普及に向けて普及センターと連携して取り組む予定です。



収穫作業の様子



出荷前の荷姿

農林センター（丹後農業研究所）

宇治茶実践型学舎3期生入舎式

当所は、宇治茶生産の担い手を確保し、新規茶業経営者の育成を図るため、令和元年度に「宇治茶実践型学舎」を設立し、京都府内での就業・就農を推進しています。

このたび、当所において、令和4年1月19日に宇治茶実践型学舎3期生伊藤裕貴さんの入舎式を執り行いました。伊藤さんは、非農家ながら、宇治茶の栽培や製造に強い関心を持ち、茶業経営で生計を立てることを志し、2年間のカリキュラムを通じて、茶の栽培や製造の実際と理論について研修されます。

当所では、伊藤さんのスムーズな就農に向けて、技術指導、座学による講義、現地実習の調整、就業地とのマッチングなどを行っていきます。



所長式辞を傾聴する伊藤さん

(令和4年1月試験研究業務月報)

試験研究課題：九条ネギへの「まめリッチ」施用による新栽培体系の確立

研究

微生物資材の施用による九条ネギの収量および

くろぐされきんかくびょう

黒腐菌核病の発病への影響を調査

当センターでは、京都府特産の九条ネギに発生する土壤病害のくろぐされきんかくびょう黒腐菌核病対策として、微生物資材を用いた新たな防除体系の確立を目指し、栽培試験を行っています。

1月には、所内および現地ほ場において収穫調査を行い、九条ネギの収量および黒腐菌核病の発病程度について調べました。今後は、今年度の調査結果をまとめるとともに、メーカーおよび生産者等と、次年度の試験に向けて微生物資材の処理方法や施用時期等について検討します。



現地ほ場（京都市）での収穫調査



収穫された九条ネギ

大学生に「京都の畜産」をビデオ配信で講義

当センターでは、京都府立大学と連携し、学生に対する畜産教育を進めています。この度、同大学から「出前語らい」の依頼があり、京都府立医科大学と京都工芸繊維大学との三大学連携教養教育科目でビデオ・オン・デマンド配信方式による「京都の畜産」の講義を1月24日に行いました。

視聴した1回生の学生169名からは、明治維新後、全国に先駆けて京都に畜産が導入された歴史や、現在でも一人当たりの畜産物消費が全国トップレベルであることへの驚きの声が聞かれました。また、担い手研修制度や畜産応援隊など行政施策に対する感想もあり、京都の畜産に対する理解を深めてもらう機会となりました。

今後もキャリア教育の一環として、京都の畜産や畜産センターの役割について、大学生等への積極的な情報発信に努めます。



大学生に向けた「京都の畜産」のビデオコンテンツ編集作業

(令和4年1月試験研究業務月報)

試験研究課題：ホンダワラ等有用褐藻類の増養殖技術に関する調査

情報

養殖アカモクの収穫が始まりました

養殖アカモクの生産拡大に向け、当センターで生産した種苗を昨年10月から11月にかけて2地区の生産者に配付しました。

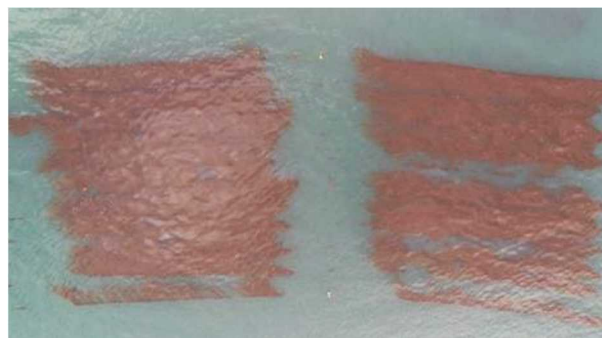
宮津市養老、舞鶴の両地区ともに生育は良好で、例年どおり2月初旬から収穫、出荷が開始されることになりました。1月時点の生育状況から、昨年と同程度の収穫量(15t)が見込まれています。

生産者、漁協では、他県産の天然ものに比べて、品質(堅さや粘り)が均一な養殖アカモクがまとまって供給できるという利点を柱にPRをしています。地元を中心とした府内での消費喚起を通じて需要と生産の拡大に繋げるため、当センターでも普及指導員とともに漁業者の取り組みを支援しています。

大型海藻の養殖は二酸化炭素の吸収源となることから、地球温暖化対策においても注目を集めています。養殖アカモクを地域の特産物に成長させるとともに、京都府内の温暖化対策の取り組みの一例となるよう、引き続き安定した種苗の供給と生産振興に取り組んでいきます。



本年1月に確認した養殖アカモクの状況



ドローンによる空撮：宮津市養老地区